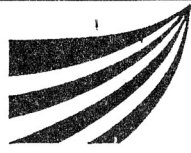


発行 放送大学同窓会
 神奈川学習センター支部
 編集者 総務委員会
 責任者 大貫京子
 発行日 平成6年3月9日

波 濤



い る か の 神

昨年九月十九日(日)、時には屋外の行事をしたいとの希望で企画された江ノ島水族館、岩屋洞窟の見学会が行われた。

事前に正確な参加者数も把握せず、全くの自由参加の形を取ったためか、三々五々江ノ島駅に参集するメンバーは皆どこことなくのどかで、日常の諸々の拘束から離脱した様子が漂っていた。今日はのんびりしよう、そんな雰囲気既に味わっているところだが、「放卒業生のグループたるもの江ノ島界限も漫然とは歩かぬ」という一会員の心意気から発案があり、出発前に用意された黒いごみ袋が配られた。

最初の気恥ずかしさもものは、捨てられた空缶等を律儀に拾いつつ、潮風に吹かれて江ノ島大橋を渡る姿は、なかなかの風情さえ感じられる。途中、江島神社の妙音弁天を是非見たいとの要望があつたが、駅での多少のロスタイムを昼食の予約時間迄に調整しなければならず、帰路の拝観を確約して一路岩屋へ。

洞窟内には鳥や岩屋の生成を説明したもの、弁天信仰と浮世絵等が分かりやすくパネルで展示されている。江ノ島はまた竜神信仰の地としても栄えたそう

であり、竜に会ったことのない人の為にと、藤沢市によつてその姿が稲妻と共に紹介されている。「ガオーツ」と暗い洞窟に響きわたる人工音が、これが市によつて企画されたものを知ると、なおさらおかしくもあり、実にほほえましい。

急な坂道を上下した後、磯の香りの昼食を取る。今回は役員外の会員が十一名(役員六名)出席されて、新鮮な話題が楽しい。

水族館は、カマイルカとハナゴンドウクジラのシヨロを見る事ができたマリナランドの印象が深く、期待以上の感動があつた。イルカ達のシヨロはテレビで見ると違って壮観であり同時にとてもあどけない。シヨロの終わりは、七、八頭のイルカとクジラによる別れの挨拶であつた。尻尾だけを水面上に出して前後に激しく振る動作が「バイバイ」なのだそう。中でも一段と懸命に水音をたてて尾を振る一頭が残って観客の視線を集めた。皆の見守る中、そのイルカは一瞬動きを止め、静寂を残して水中に消えていった。イルカは本当に挨拶しているつもりなのだろうか。イルカにとつて尾を振ることが意味の無い動作の一つにすぎないとした

ら、人間の側で都合の良い芸を教え別の人間がその意味を誤って解釈しているにすぎないのではないか。しかし、真意はどうあれ、イルカの懸命な動作は、人間間の通り一辺の挨拶とは違った暖かい感動を観るものに与えた事は間違いない。

「イルカは精神を病む人を治療する能力を持っている。海で泳ぐ人間の回りを巡って一緒に遊んでくれるという。イルカに遊ばれて、人はゆつたりと心が開かれ癒されてゆく」と、いつか耳にした話を思い出したい。イルカについてもう少し知りたいという思いが湧いた。こんな思いがけない、新鮮な体験が出来て貴重な一日であつた。

Q 生



フオスター・プラン活動報告

神奈川学習センター支部では、活動の一環として九一年末にフオスター・プラン実行委員会を設立し、(財)日本フオスター・プラン協会を通して、フオスター・プラン参加活動を推進してまいりました。(フオスター・プランとは主に発達途上国の子供達への生活・教育に対する援助を行うものです。)

当初、私達のフオスター・チャイルドはグアテマラのピラールちゃん(女子十四歳)だけでしたが、その後、タイのソムチャイ君(男子八歳)が加わり、今度新たに、ケニヤのルーシーちゃん(女子四歳)をチャイルドとして迎えることができました。これもひとえに会員の皆様の暖かいご支援の賜物と実行委員一同深く感謝致しております。

フオスター・ペアレントの私達からチャイルド達には、時折手紙や写真を送っており、チャイルド側からは、本人や家族の書いた手紙や絵、写真や近況報告が送られてきます。最近送られてきたチャイルドの写真を見ると、ピラールちゃんは当初と比べ、背が急に伸びて、表情も大人っぽくなってきた様に思われます。ソムチャイ君は坊主頭の賢そうな少年です。また、ルーシーちゃんは、まるまる太つてとても可愛い女の子です。いろいろ送られてきたものの中で、今回はソムチャイ君の家族から送られてきた手紙をご紹介しますと思います。

* 親愛なるフオスター・ペアレント様 *

* こんにちは。皆様お元気ですか。まず *

* 初めに、ソムチャイにご援助いただき心 *

* から感謝致します。

* それでは、ソムチャイのことをお知らせ *

* せしませよう。彼は一年生で勉強してい *

* ます。家族は、祖父母、ソムチャイ、母 *

* 親、それに私の五人です。しかし、現在 *

* は、母親は家を離れております。私達は *

* 農業で生活しています。ソムチャイの誕 *

* 生日を祝ってやったことはありません。 *

* 最後になりましたが、皆様のお幸せを *

* お祈りしています。

* 心を込めて

* フオスター・チャイルドの叔父の

* ブンライ・トングマ

* このような私達の活動をより広く知っ *

* ていただくために、委員会では、チャイ *

* ルド側から送られて来た手紙や写真、資 *

* 料を一月十九日より一カ月間、神奈川学 *

* 習センター談話室に展示いたしました。

* 今後も、多くの皆様のご理解を得られ *

* るよう努めると共に、チャイルドとの活 *

* 発で親密な交流をめざしていきたいと思 *

* っております。

* 尚、実行委員会では、寄付を募集して *

* おりますので、ご支援の程宜しくお願い *

* 申し上げます。

フオスターが変更
番号が変更
座番
よ座
日替
某振
月便
5の
年郵
6の
平成
に
なり

振込先
横 5 3 7 7 2 3
浜 大 学 同 窓 会 F・P
放 送 大 学 同 窓 会 F・P
(平成6年5月某日)

0 0 2 5 0 4 3 7 7 2 3
放 送 大 学 同 窓 会 F・P
(平成6年5月某日)

講演会開催される

平成五年一月一四日(日)一時より神奈川学習センター・第一講義室におきまして、放送大学、坂井素思助教授によります『イギリス経済の文明的視点』と題する講演会が行われました。参加者は三二名、イギリスから帰られたばかりの先生のお話は、とても身近に感じられました。撮影されてきたビデオを見ながらのお話は楽しく、時間の関係で途中までしか見られなかつたのが残念でした。そんな方の為にとゆうわけではありませんが、平成六年度から始まる坂井先生の講義で、もっと詳しくお話して下さるとのことです。お楽しみに!

十二月九日(水)大きなベツトで三つの枕とたわむれている内に朝になる。フラッグ・スタッフの朝、やはり快晴。八時半に出発、アリゾナ砂漠は広い!ただ広い見渡す限りなにもない砂漠。遠くに「バリンガー隕石孔はこちらですヨ」と言う、大きな立て札が立っているだけ。バスの中は温度調節がされているので、外が暑いのか寒いのかよく分からない。学生の中には、帽子とマフラー、手袋まで用意している人もいる。バスを降りると、さほど寒くない。しかし、まるで月面みたい。見渡す限り何もなし。砂漠の一角に大きなクレイターがあるだけ。直径一二七〇m、深さ一八〇mの巨大なクレイターである。発見されたのは百年ほど前のこと。落ちた隕石の重さは、十万吨とも三十万吨とも言われている。この隕石孔を発見したバリンジャーは、隕石を売って大儲けしたと言う。さすがアメリカ人!隕石孔の縁を一周り出来るのだが、学生のなかには元氣な人がいて隕石孔のなかに入り、中心まで行きビデオを撮ってきた人もいた。レストハウスではインディアンの作ったマット、タペストリー、モビール等が売られていた。しかし、きわめつきは隕石が一個(小さいの)一ドルで売られていたことで、二十個ほど買った。そつでまたもや失敗!

前夜泊まったホリデーイン・フラッグスタッフのルームキーを持ってきてしまったのだ。添乗員が「記念にもらっておいたら・・」と言うので素直にもらってしまった。ドライブインでバイキングの昼食をとった。料理の種類が多く、どれもおいしそう。肉料理、パン、サラダ、ジュースそしてケーキとアイスクリーム。食べ過ぎた。夕食分も食べた感じ、これではダルマさんの様に太ってしまう。(今とあまりかわらないかな・・?)満腹のお腹をかかえてローエル天文台へ向かう。(ウーン、クルシイ)

この日のバス移動はかなり強行軍であった。フラッグスタッフの町に着いたのは、午後二時を過ぎていた。ローエル天文台はうつつすらと雪化粧していた。同行している新聞記者のI氏が、わざわざ日本からキリンビールのカン入りを持ってきた。ドーム型をした彼のお墓にそのビールを供え、全員一分間の黙禱をささげた。ローエルは一八八三年(明治一六年)から一八九三年まで何回か帰国したが、通算十年間日本に滞在している。その間彼は、能登半島のなかほど七尾湾に面した穴水に二週間ほど旅行したりしている。また、日本に滞在中の彼の好物は、このキリンビールだったのだ。そして帰国した翌年の一八九四年ローエル

はフラッグスタッフに天文台を設けた。松の木で作られたドームの中に入ると、とても良い香りがした。小尾先生と顔馴染みの説明員が、にこにこしながらローエルについて、またこのドームについて話してくれた。彼の愛用した六十一cmの屈折望遠鏡の鏡筒は青く塗られ、向きをかえるのに長いロープをひっぱったり、説明員はジェスチャーを加えて、おもしろおかしく話してくれた。あいかわらず学生諸君は、お喋りが多く写真を撮るのに夢中である。私は前日の現代の技術の粋を集めた、あのキットピークをみているだけに、百年程前にローエルがこのドームで、この望遠鏡で火星のスケッチをしたり観測したのかと思つたとき、冷たい望遠鏡に触れながら涙が出てきた。なんとも言えない感動を覚え、自分が天文学をやつてきて良かったと思つた。そして、寒さの中で観測しているローエルに、心から頭の下がる思いであつた。天文台の隣りにドーム型をしたお墓があり、そのまた隣りにやはりドーム型をした資料館がある。その中に入るとドームの中央から土星型の照明器具が下がり、室内をみまわすと、彼が読んだ本や、火星のスケッチや、器材の数々が置いてあつた。おみやげコーナーで、皆はビデオを買っていたが、私は本を一冊と日本に

帰ったらパネルにしようと思ひ、大きな星座ポスターを買ひ込んだ。我が家に来られる人は台所の壁にこれがかかっている。ゆつくり見ていた。後髪を引かれる思いでローウエル天文台を後にしたのは、もう夕方になっていた。宿舎のバストウエスタン・キャニオンスクエアに着いたのは、もう七時を過ぎた。なんとカントリーっぽいホテルで、回りに二階建ての建物はやはりない。このホテルも一階しかない。またもや一人部屋。ここで書かなければ日本に私の方が先に着いてしまふと思ひ、家族や友人に絵葉書を書き始めた。十五枚程書いてから夕食でも思つたが、お昼の暴食がたつた空腹にならない。地下のゲームコーナーでサンドイッチを買ひ込み、部屋でわけのわからないテレビドラマを見ながら食事を済ませる。小尾先生から観望会をするから集まるように言われ、三脚とカメラを持って集合した。ホテルから少し歩いて暗い所を探した。星の説明や観望が、一時間程おこなわれた。私は皆から少し離れた所で写真を撮り始めた。やはりいたのだ。カメラを上に向けて「撮れるかしら」と言つて、フラッシュをたいている人が。I氏が持つてきた双眼鏡で覗いているのだが、始めての人が多く「きれい、きれい」を連発して「寒い、寒い」を連発していた。

つづく

『身体障害学生の支援について』

会長 加藤 あいし

放送大学には、一般の大学よりも多くの身障学生が在学しています（平成五年度二学期現在二二九名、うち神奈川三三名）。

この度、大学側と同窓会本部との話し合いの中で、「放送大学身障学生支援連絡会（仮称）」を設置し、こうした学生の支援を行うに努めました。その一環として、本部から各支部宛、連絡委員を一名選出するようにとの要請がありました。同じ大学で学んだ者として、心から声援を送り、修学を支えてあげたいと思ひます。

つきましては、会員皆様のご意見・ご提案、委員引き受けのご意向などを下記にお寄せ頂きたく、よろしくお願い申し上げます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

宛先

〒232 横浜市南区大岡二―三一―一
放送大学同窓会
神奈川学習センター支部

編集後記

誘われるままに編集作業に携わることになりました。編集の経験もないので、委員の皆様のご指導・ご援助を戴くことが多く、足手まといになつたと思ひますが、その責務を終えることになり、ホットしております。

同窓会活動を通じ、校友関係を深めたり、大学の改革や優秀な卒業生の動向など、興味ある様々な話題にもふれることができ収獲でした。限られた紙面に全ての情報を紹介することは不可能なことで、学習「波濤」の発行が続くことで、学習センターの雰囲気や同窓会活動の状況がお伝えできれば幸いです。

最後に、会報が卒業生相互の絆を保つよすがとして、さらには、年々増加する同窓会員のエネルギーを加え、受け継がれることによつて、同窓会活動の限らない発展を念じております。

(倉)

同窓会本部総会のお知らせ

総会
日時 平成6年5月15日(日)13:00~14:30
場所 国立教育会館 601大会議室(6階)
〒100 千代田区霞が関3-2-3
☎03-3580-1251

講演会
日時 平成6年5月15日(日)15:00~16:00
場所 国立教育会館 601大会議室
講師 小尾 信爾 学長
演題 未題